

千里地理通信

Newsletter of Department of Geography and Regional Environment, Kansai University

Contents

Page 1
歲月河 野間晴雄Page 2-3
履歴、主要研究業績
と小文Page 4-5
教員から
時空間の創造史観—
野間先生—黒木貴一
博学の野間先生に助
けられて 土屋 純
俯瞰的な視野の重要
性を教えてくれた野
間先生 松井幸一Page 6-7
教え子から恩師、野間先生
河野 茜
野間先生への感謝
川勝雄輔
足で稼ぐ大切さ水野 真
野間先生との思い出
村上佳美
仰げば尊し 浅野祐斗
野間先生から垣間見
えた生き方
吉村虎太郎Page 8
卒業生だより地理学専修と現在
米本千夏
2024年度教室行事予定Page 9
同窓会事務局ニュース
大学院生の研究業績Page 10-11
研究ノート天井川の発達過程から
見た自然災害と水
利用の特徴 潘 多Page 12
学窓から関大の地理教室での3
年間と地理学の認識
張 銘珊Page 13-14
日帰り巡検報告岸和田と貝塚
巽 愛華Page 14
実習調査報告熊本県熊本市での実
習調査 平井杏潤Page 15
教室だよりPage 16
随想アジアのフィールドワーク
と野間先生の思い出
佐藤廉也Page 9,12,14
2023年度卒業生・
修了生からのひと言Page 14
新専修生からのひと言

歲月河

野間 晴雄

この3月末、古稀70歳で45年の大学教員生活の幕をひく。昭和・平成・令和と3代の歳月が重なる。京都大学大学院文学研究科を修士2年で修了、すぐ奈良大学文学部地理学科の助手に25歳で採用されたので、博士課程（後期課程）には進学していない。現在のキャリアパスでは考えられないことだろう。大阪の公立御三家、府立第一高等女学校の流れを汲む大手前高校に、枚方の公立中学から進学したが、理工系・医学系しか人でない風潮が肌にあわずドロップアウト。かといって、父が勤めていた北浜の金融・証券業界や金儲けにも関心がなく、団塊世代の過酷な競争と自己主張、学生運動にも馴染めなかった。

宮本常一らが中心になって平凡社からシリーズで刊行された『風土記日本』のような民衆史、民俗学を志し、現役のときは東京教育大学の「史学方法論専攻」を受験した。当時は文学部にいくと、マスコミ・出版、教職しか専門を活かせるころはなかった。一浪して京都大学に入学後も、両親は法学部か経済学部へ転部を望んでいたが、教養部で受講した「人文地理学」の藤岡謙二郎先生の人間味の虜になった。

1年次から先生が主宰された民間の野外歴史地理学研究会（FHG）の編集発送作業などを、毎土曜日、北白川のご自宅で、他大学の学生といっしょに手伝った。自ら“野人”と称した（考古学から地理学に転向）先生は、酒にとことんつきあい、癖のある先生の字が読めると一人前の弟子といわれた。最初に勤務した立命館大学の学生から、京大退官後に行かれた奈良大学の学生まで分け隔てなく接しられた。そのDNAは私にも十分引き継がれていると思う。不満を言う前に、与えられた課題や環境・状況で何ができるかを能動的に考えるプロデューサー的な仕事が向いていると思うようになった。

奈良大学ではよく学生と間違えられた。学科のプリントを慣れない和文タイプライターで作成し、共同研究室に来られる10人の専任教員や多くの非常勤講師の先生方にお茶を出して会話に加わり、耳学問が鍛えられた。英語は苦手だが、地理的センスの鋭い学生諸君と青春時代を謳歌できた。この激務のなか、ひとり助手で半年間の東北タイ農村調査を認めていただいた教室の英断には感謝しかない。 Deng熱で初めての入院を現地で経験したが、その後はよほど湿潤アジアの地からだが適合したのか、南ア



2023年8月 モンゴル高原にて

ジアやアフリカ、中央アメリカの過酷な現場でも十分に楽しめ、さまざまな会議や酒宴を通じて現地の人々との交流が深まった。

私は言語を周到に学んで現地に入るスタイルではない。学生にはとにかく、若いうちには狭く固まるまえに冒険をせよ、五感を働かせて記録をマメにつけよと助言してきた。ただ、私自身は、最近、すっかり野帳をつけなくなったが、雰囲気を感じて大枠を把握し、内在する論理やシステムを見いだす眼力についてはついてきたと実感する。さまざまな場所や地域の事象に、長い時間、短い時間、さらに人間をどう絡ませるかの少しは高みでみわたす境地にたどり着けたという思いがある。資料の集積と書物の速読のおかげであるが、それを探するための時間への膨大な投資もした。この所作をIT社会では無駄とするが、私は寄り道の効用と考えたい。

滋賀大学では教育学部に所属したが、小中学校の教員養成課程の学生指導は全くの手探りだった。ただ、1年次から毎年、滋賀県下の地域調査を行い、学生にはレポート作成を課し、その成果を教員が大学紀要にまとめる伝統があった。当時は県内出身者が大半で、卒業論文も滋賀県を対象にしたものが多かった。地域の知見を深めるとともに、幾重にも歴史の襞が重なりあう湖国近江の風土の魅力に夫婦で目覚めた。

数年前、琵琶湖を臨む比良山麓に別宅を購入した。妻はここをアトリエに、日本画、読書、庭仕事と旅行三昧、私は今の家でこれまで書き散らかしてきた論文や収集資料を糧に思考の集約をはかる。ふたりつかずはなれずの老夫婦での二拠点居住を考えている。

40歳で奈良女子大学文学部に配置転換（1993年4月）。ここは3学部の小規模大学ながら、奈良女子高等師範学校の伝統を受け継ぎ、当時でも、自然地理、人文地理、地誌の3講座6名の教員と助手1の陣容で、授業負担は少なく予算も潤沢で、恵まれた教室といわれていた。中

部・西日本各地を中心に全国から才媛が集まり、卒業論文の対象地域も全国に広がり、海外をフィールドにする学生もでてきた。中国、韓国、ミャンマー、ベトナムの留学生の指導を契機に、彼の地を訪問し見聞を広めることもできた。人数が少ないので卒論演習は教員全員が合同で行い、全卒業論文を見渡せた。学生にとっても、みんなの研究を発想から完成までのプロセスとして俯瞰できる利点は大きかったが、理不尽な教員の勝手な注文に戸惑いもしただろう。

着任1年半で、JICA 専門家として家族での17か月のバングラデシュ滞在を認めていただいた教室の度量は有り難かった。ただ、帰国後、しだいに大学・文科省の締付けが厳しくなり、改組改組の号令と書類作成をむなしく感じるようになった。そこに降って湧いた臨床心理学教授の懲戒免職と、その後身分保持が認められて復職という見えない圧力に嫌気がさした。今もって「いじめ」や「心の専門家」には強いアレルギーがある。

そんな窮地の私を拾っていただいたのが関西大学である。転任の挨拶状を送ったら、ある先輩教員からは「水を得た魚」という返信をいただいたが、あながち的外れでもない。それほど、この22年間は気分よく教育と研究に打ち込めた。ただ、それを単著というかたちではまとめられなかった。その代わりに、世代を異にするさまざまな人びとを繋いで、劣等感にさいなまれ、勉学や生きる意欲を喪失しかけていた学生を、地理学のフィールドに呼び戻して共同体験することで、掬い上げることができた。権威や名声には無縁であったが、大きな心の豊かさという財産を得た思いである。

関大では専修の1学年の学生数が15～30名で、4名の専任教員が卒業論文指導をする。ただしどのゼミも同じ曜日時間帯に設定、合同中間発表会を9月下旬に設けた。大学院生や下級生も参加する。この緊張感とフォーマリティを維持する仕組みを在職期間に徐々に確立できた。その連帯感の象徴が、教室・同窓会・学生をつなぐ

この「千里地理通信」だと感じるようになった。教室の記録と読物要素がほどよくマッチした小冊子だが、あえて業者に印刷を委託、総勢80名足らずの教室で年2回刊行、何度も増刊特別号も出しながら、ウェブでの閲覧まで維持できたことは奇跡でもある。刊行費用が払底したときには、教室OBでノエビアホールディングス代表取締役社長の大倉俊氏からの多額の寄付によって事なきを得た。この原資をもとに教室の充実、学生も満足感充足に役立てたいと教員4人で夢を語り合った。

専修では学部から博士の学位授与までを担い、50名に及ぶ非常勤講師の人選依頼、時間割編成、入試など業務量は膨大であるが、その達成・満足感も大きい。忌憚のない和気藹々の雰囲気にとりだけ助けられたことか。美しいキャンパスの安らぎと事務のてきぱきとした対応が働きやすい職場を創りあげている。

恩師藤岡先生の本領は歴史地理学であるが、私はその正統な継承者ではない。自然環境、生態学、考古学、人類学、農学、社会経済史、家政学、技術論など学際領域を振り子のように往復して定年を迎えた。「エコトーンの迷人」とは場所の境界を逡巡する自画像でもある。陸地と水域のはざまの湿地・デルタから始めた研究が、稲作からプランテーションへ、技術史、植物のグローバル史、港市システム、大航海時代と広がり、地域もユーラシアから環大西洋まで拡散した。昨年の8月には夫婦で初めてモンゴルを訪問した。草原遊牧社会の変容は私の史観に大きな一撃を加えた。狩猟・遊牧から農業、工業社会、そして情報社会へ、常套的な段階説を峻拒する混沌（カオス）が表出していた。

これからは授業や会議の縛りもない世界で研究と旅を愉しみ、若い世代への継承を考えていきたい。「♪橋を探そう歳月河に…」。ちあきなおみが船村徹メロディを切々と唄う。日々の時間に追われることなく、春・夏・秋・冬の季節に身を委ね、あと10年は精進したい。

(のま はるお：本学名誉教授)

履 歴

野間 晴雄 (のま はるお)

生年月日：1953 (昭和28) 年5月21日

専門分野：地誌学、農業・農村地理学、歴史地理学、地理教育、地理思想

現住所：〒573-0075 大阪府枚方市東香里1-10-14

学 歴

1969.4.1 (入学)～1972.3.31 (卒業)

大阪府立大手前高等学校・普通科 (3年)

1973.4.1 (入学)～1977.3.31 (卒業)

京都大学文学部史学科、人文地理学専攻 (4年)

1977.4.1 (入学)～1979.31 (修了)

京都大学大学院文学研究科修士課程、地理学専攻 (2年)

職 歴

1979.4.1～1983.3.31 奈良大学・助手 (文学部)

1983.4.1～1984.3.31 滋賀大学・講師 (教育学部)

1984.4.1～1993.3.31 同・助教授

1987.4.1～1988.3.31 京都大学・助教授 (東南アジア研究センター) 併任 (1年)

1993.4.1～1994.8.20 奈良女子大学・助教授 (文学部)

1994.8.21～1996.1.7 国際協力事業団 (JICA) 長期専門家 (農

村開発) バングラデシュ国に派遣 [奈良女子大学はこの間休職]

1996.1.8～1997.9.30 奈良女子大学・助教授 (文学部)

1997.10.1～2002.3.31 同・教授 (文学部)

2002.4.1～2021.3.31 関西大学・教授 (文学部)

2021.4.1～2024.3.31 関西大学・特別契約教授 (文学部)

学 位

1979.3.31 京都大学 (文学修士)「低湿地における生態システムと稲作農業—蒲原平野を事例として—」

2006.3.31 関西大学 (博士・文学)「湿潤アジア稲作社会の歴史生態研究—農業・技術・村・生活の変容をめぐる比較地誌—」

受 賞

2006.9.21 ベトナム科学技術連合会賞、同・勲章

2011.11.12 人文地理学会学会賞 (学術図書部門)

2022.11.23 ベトナム国家大学ハノイ校・学術交流功労勲章

所属学会

日本地理学会、人文地理学会、東北地理学会、地理科学学会、日本民俗学会、農村計画学会、社会経済史学会、日本地理教育学会、日本都市学会、近畿都市学会、奈良地理学会、東アジア文化交渉学会、全国地理教育学会、野外歴史地理学研究会、滋賀の食事文化研究会、関西大学史学・地理学会

在外研究

2013.9.24～2014.9.23 関西大学在外研究（調査研究員）イギリス、スペイン、メキシコ、キューバ、ジャマイカ、バルバドス、パナマ、アメリカ合衆国等で調査

大学非常勤講師歴 *は集中講義

追手門学院大学、奈良大学、摂南大学、滋賀医科大学*、京都大学、立命館大学、大阪大学、福井大学*、奈良女子大学、香川大学*、和歌山大学*、滋賀大学、京都女子大学、関西大学、帝塚山大学、神戸大学*、九州大学*、名古屋大学*、茨城大学*、筑波大学*、関西学院大学、大阪市立大学、龍谷大学、大阪経済法科大学、近畿大学、鳥取大学、コンケン大学大学院*、ベトナム国家大学ハノイ校*

海外での調査・訪問国・地域（下線国は2か月以上滞在）

韓国、香港、中国、台湾、モンゴル、マカオ、タイ、ラオス、ベトナム、カンボジア、ミャンマー、インドネシア、マレーシア、シンガポール、バングラデシュ、インド、ブータン、パキスタン、ネパール、スリランカ、アラブ首長国連邦、イギリス、アイルランド、ドイツ、オランダ、フランス、スペイン、ポルトガル、イタリア、バチカン市国、スイス、ハンガリー、オーストリア、ポルトガル、アンドラ、ベルギー、モロッコ、セネガル、マリ、メキシコ、アメリカ合衆国、オーストラリア、キューバ、パナマ、トリニダードトバコ、スリナム、ジャマイカ、バルバドス、ハイチ、プエルトリコ、ドミニカ共和国

主要研究業績と小文

〈単書〉

低地の歴史生態システム—日本の比較稲作社会論—、関西大学出版部、2009、全497頁

序、1. 歴史生態システムの理論と方法、2. 稲作社会における歴史生態システムの類型 3. 蒲原平野における歴史生態システムと農業景観、4. 稲作技術からみた蒲原平野の開発過程、5. 蒲原平野における湿田稲作技術と民俗分類、6. 新潟平野の現代的変容へのプロセス、7. 有明海沿岸における開発の歴史生態、8. 『疏導要書』にみる佐賀藩の治水と利水、9. 近江盆地の開発と歴史生態環境、10. 近江盆地における伝統的水利体系と村落結合、11. 犬上川扇状地の水利変化と稲作社会・農民の記憶、12. 食文化要素からみた近江・伊賀・伊勢の三国国境地帯の意義、13. 地域のなかの技術と職人、終章、アジアにおける日本稲作の発展過程の諸相

邦楽器系制作（選定保存技術の記録）—橋本太雄—、滋賀県教育委員会文化財保護課、

〈主要な編著、共編著*、共著**〉

Select Records on Agriculture and Economy of Comilla District:1782-1867*、JSARD Publication No.13、JICA、Dhaka (Bangladesh)、1989

『新訂 歴史地理』**大明堂、1990

Final Report on Joint Study on Rural Development Experiment (JSRDE)* JSRDE Publication No.8.、BARD & JICA) 1995

『東南アジア（朝倉世界地理講座—大地と人間の物語—3）』* 朝倉書店、2009

『文化システムの磁場—16～20世紀のアジアの交流史—』関西大学出版部、2010

『ジオ・パル NEO—地理学・地域調査便利帖—』**海青社、2012、2017

『地図でみる城下町』*海青社、2020

『風景表象の比較史』関西大学東西学術研究所、2023

『47都道府県・城下町百科』*丸善出版、2023

〈分担執筆〉*編集委員長

都市・農村関係モデルとしてのハノイ—都市化とドイモイ以

降の農村変化、成田孝三編『世界の大都市圏（下）—多様なアプローチ』大明堂、1999

熱帯地理学の成立と欧米地理学者のみた東南アジアの稲作、千田稔編『アジアの時代の地理学—伝統と変革』古今書院、2008

朝鮮農耕システムの核心とその伝播あるいは変形について—黄海経由の文化交渉の可能性、森隆男編『住まいと集落から風土をさぐる—日本・琉球・朝鮮』、関西大学出版部、2014

奈良地理学会編『大和を歩く—ひとあじちがう歴史地理探訪』*奈良新聞社、2000

人文地理学会編『人文地理学事典』*丸善出版、2013

〈自治体史〉

新庄町、東吉野村、草津市、蒲生町、日野町、東近江市史能登川、米原町、志賀町、茨木市

〈学術論文〉

野生ユリの栽培化から球根商品化への過程—鹿兒島県甌島と沖永良部島の比較、人文地理、30 (3)、1978

農民社会における時間配分研究 (time allocation) のコンテクスト—第三世界を中心に、人文地理、40 (2) 1988

英領期ベンガル低地の開発と農業—史料による歴史地理的素描、東南アジア研究、28 (3)、1990

バングラデシュ村落社会と村落研究—農村開発を指向した研究史的展望、東南アジア研究、33 (1)、1996

王権とその背域—東南アジア港市論と水利都市論の拡がりをめぐる、歴史地理学、41 (1)、1999

P. グルーのみたベトナム農村空間と「米の力」—『トンキンデルタの農民』再検、関西大学文学論集、52 (3)、2003

東北タイ農村40年間における小学生の意識変化—ドンデーン村を事例として、史泉、105、2007 [野間晴雄・岡田良平]

17～19世紀江戸・東京近郊の花き園芸の発達と空間的拡散—グローバル/ローカルな視点からの菊の歴史地理、東アジア文化交渉研究紀要、3、2010

王立キュー植物園の設立と拡大（前編）—大英帝国ネットワークの一翼、関西大学東西学術研究所研紀要、47

枚方市80年の経験と記憶—香里団地という郊外空間創出とその顛末、ジオグラフィカ千里、1、2019

ニューオーリンズの風景—コロニアルから現代へ、関西大学文学論集、72 (1・2)、2022

〈エッセー〉*退職・追悼特別号

『千里地理通信』、関西大学地理学・地域環境学教室、関大地理同窓会

2000：豊かさのなかの地域研究 (43号)

2003：なつかしき顔と新しい家—東北タイ・ドンデーン村再々訪 (49号)

2006：菊に寄せて (54号)

2009：東西学術研究所の縁 (えにし) (60号)* [橋本征治]

2009：地域を見る眼力—朝宮茶と宮座から (61号)

2012：大学地理学の学士力とのかたち (66号)

2014：プエルタ・オサリオだより—セビーリャ・オレンジ街路樹のもとで (70号、71号)

2014：追悼 高橋誠一先生 (71号)* [高橋誠一]

2017：赤い地形図 (76号)

2018：青い海図 (79号)

2018：先進国都市圏の現在を逍遙する伊東先生 (80号)*

2019：時を刻む径行の地球科学者 (82号)* [木庭元晴]

2021：春はまだ来ぬか (84号)

2023：ベトナムに恋して25年—ひとづくりの学術交流 (88号)

2023：強靱な信念を裡に秘めて (89号)* [末尾至行]

2024：歲月河 (90号)

野間先生は、京都市のお生まれで、大阪の名門、府立大手前高校から、京都大学文学部に進学されました。その後、藤岡謙二郎先生の薫陶を受けて学問の道に進まれ、水津一朗先生により人文地理学を修められました。修士課程終了後、奈良大学文学部に始まり、滋賀大学教育学部、奈良女子大学文学部を経て、2002年から関西大学に奉職し22年が経過しています。2018年には人文地理学会の会長にも就任されています。Researchmapの研究キーワードは、アジア、デルタ、持続的開発、農業技術、農村、灌漑水利、新田開発、文化生態、地理思想が挙がっており、農村を核とする地域研究がグローバルに展開されています。

野間先生が、キーワードに関する膨大な業績を持たれていることは周知の事実です。しかし本稿の執筆者は、5年前までは業績も名前すらも全く存じませんでした。

ただ、本学在職の4年間に、先生のお人柄と研究姿勢をうかがい知る機会があり、また節目に論文別刷や複写を何気なく頂戴する機会を重ねるうちに、皆様が思い描く野間先生像に近いものは構築できたように思います。

先生は近年、砂糖流通に関し東南アジアから日本を対象に探求されていますが、流通への関心は砂糖にとどまらず付随する文化にも及んでいます。たとえば「潜伏キリシタン・隠れキリシタン集落の立地と信仰の場」(野間, 2020)に、環シナ海を舞台とする印象的な論考が示されています。古来のアニミズム信仰を、仏教が包み、包みはがれてキリスト教が覆い浸透し、ところがキリスト教が禁教となって、さらに神道や仏教などで個々に隠し覆われた状況で明治期を迎えたという概念図の紹介です。その後、潜伏キリシタンすなわち近代以降にカトリックに改宗した信徒、の多い集落が世界遺産登録で恩恵を受けたと述べています。地理的条件に基づきキリスト教の顕在化と潜在化の対照が鮮明化していると予察されました。

これは物と文化の伝播を時空間的に追究する姿勢がよく示されている研究例かと思えます。

余談になるかもしれませんが、長崎以外、たとえば近畿で神社を巡ると、明治期の神社統合の際に、地域の事情で神社が天満系、恵比寿系、金毘羅系あるいは素戔鳴系などに集約され額に社名が入り、他は同じ境内で摂社化した姿が良く見られます。また民俗を示す石碑は都市化のあおりを受け境内に集められてもいます。この状況は素人目で見ると明治時代初期に、長崎で起きた現象と同じように感じられるため、さらに研究の進展が期待されます。

さて関西大学地理学教室の学部・院ともに充実した教育カリキュラムは、卒業生皆様もご退職の先生方も含め

よく知られている所でしょうが、在職教員には、その維持のため尋常ならざる心配事が毎年秋に訪れます。多数の地理関連科目で構成されるそのカリキュラムは、他大学の非常勤講師約50人の支援を受けて実現しており、またご都合等により継続いただけない場合も生じます。そして新しい先生への依頼機会が生まれます。ところがその都度、野間先生に何え、人文・自然に関わらず近畿圏にお住いで担当可能な先生を、即何人も挙げていただけます。それを可能とするのは、共同研究や学会活動の中で培われた人間関係であり、その関係は、先生の柔軟で優しいお人柄もあって、ウェブ状に広がる人脈となりより深化していることが明らかです。

これは研究課題への取り組みで、人脈による地理空間が充実されてきた好例かと思えます。

そして人脈で忘れてはならない事は、数多くの薫陶を受けた学生皆さんではないでしょうか。「ダッカの賓客」(野間, 2022)によれば、JICAの農村開発専門家としてご家族と共に赴任されていたバングラデシュのダッカに、奈良女子大学の地理卒業生が訪問され、その後の交流は地理学専修に多くの幸をもたらしたそうです。また聞くところによれば、単身ベトナムに赴き、多くの大学を訪ね歩き、研究支援の期待できる地理学者探しを行われたそうです。その後、本学学生を送り込み、また現地学生が本学に留学し、そしてベトナム国家大学ハノイ校との交流が現在も続いています。そして多くの薫陶を受け大学、小・中・高校等で教える立場になった卒業生もあり、地理空間を創造できる野間ワールド後継者は今後輩出され続けることでしょう。一方で、道を見失った学生に対し、個人特性や家庭環境までを把握した上で、最適解を見出しそこに就学誘導する迅速な対応が見事だった出来事も多く目にする機会があった事も付記しておきます。先生の広範で柔軟性のある学識は、学問領域にとどまらず人の生きる道へも適用され、人脈は強固になっていくことを示しています。

これらは先生の持つ人脈による地理空間が、後世に引き継がれていく持続可能な姿であることを示しているように思います。

このあたりで紙幅が尽きるようです。私たちは、ここで振り返ってきたように、人、物、文化等の時空間の創造を自在に成してきた師、野間先生を、関西大学から見送らねばならない時がとうとう来てしまいました。

先生が、4月から別の環境に移られ、さらに広い空間創造が始まる出発点にあたり、今後の、ご活躍ご発展をお祈りする以外にございません。ますます私達を地理で楽しませてください。ありがとうございました。

(くろき たかひと：本学教授)

関西大学に赴任してから5年が経とうとしています。これまで群馬県(18年)、東京都(1年)、愛知県(13年)、宮城県(16年)と居を移してきましたが、関西で

の生活は初めてですので、関西大学に赴任した当初は期待と不安が半々の状態でした。

土地勘や人間関係が乏しい状況でしたが、年々その基

盤が充実しつつあります。関西の地理については、色々な場面で野間先生にご説明いただき、知識を増やすことができています。特に、例年5月に行われる一泊巡検、そして10月に行われる日帰り巡検は、景観や食などがメンタルマップに結びつけられていくので、様々な知識が身体に染み入っていく感じがあります。学生を引率する立場ですが、野間先生のご説明を聞いていると学生の気分になることが多いです。

特に印象的なのは、2019年10月6日（日）に実施された「南山城・京田辺市と井手町の都市化と自然改変」をテーマとした日帰り巡検でした。南山城や京田辺といった京都府南端の地域には、なかなか観光では訪れることはしない場所ですので、どのような景観が見られるのか楽しみでした。松井山手駅周辺の住宅地開発から始まり、一休寺に至るまでの道程では多くの古墳を見ることができました。身近な空間に太古の歴史を感じるができる、まさに関西地域の特徴だと思いました。一休寺では綺麗な庭園を見ることができ、京田辺駅から飯岡までの移動途中では、大規模な天井川とその改変工事を見ることができました。教科書で学んでいた天井川ですが、現地を観察するとその形成メカニズムや地域の生活との関わりについて、より深く理解したいという気持ちになりました。飯岡では茶園景観を見ることができ、野間先生による詳しい説明を聞くことができました。そし

て木津川を渡って井手町に到着した時にはすっかり夕刻になっていて、天井川の下をJR奈良線がくぐっているのを観察して巡検が終了となりました。このように鉄道の面白さが含まれるのも野間先生による企画の特徴でした。

あまりにも長い徒歩での移動の中、多くの学生が脱落しかかっていたましたが、野間先生は常にずんずんと先頭を歩いていらっしゃいました。このように巡検する中で、場所で展開されてきた営みを体感として理解していくこと、野間先生はその後ろ姿で示されていらっしゃいました。野間先生のスピリッツを受け継いでいくこと、この地理学の醍醐味を継続させていきたいと思えます。

野間先生がご退職された後、一泊巡検や日帰り巡検をどのように企画していくのか、大きな課題となっています。2024年度以降のスタッフは、私も含めて関西出身者がいない状況になります。1回生向けの授業などで野間先生をご紹介します時には「生きた百科事典」と表現するのですが、野間先生の知識なくても巡検を企画できる基盤をなんとか構築していきたいと思えます。今後も野間先生にお知恵を拝借させていただくことがあるかと存じますが、その際にはよろしくお願い申し上げます。また、日帰り巡検などご参加いただき、現地でご説明をいただけると嬉しいです。今後ともよろしくお願い申し上げます。

(つちや じゅん：本学教授)

■□教員から□■

俯瞰的な視野の重要性を教えてくれた野間先生

松井 幸一

野間先生が関西大学に着任したのは私が学部生の時であった。ただ私自身はすでに4年生ゼミに所属しており、授業を履修することはなく、新しい先生が着任したんだなという程度の感覚であった。大学院に進学後も専門が異なることから、正式に授業を受講することはなかった。ただし大学院同期の友人が野間ゼミ所属のため、野間研究室に顔を出し始めると、先生は私の研究にもアドバイスをしてくださった。先生のアドバイスは非常に幅広く普通のゼミとは異なる視点から大変参考になり、私もダブルゼミの形式で木曜夜のゼミにも出席するようになった。こう振り返ると正式なゼミ生ではないが、私も多少はゼミ生であったと言えるのかもしれない。

当時、私が所属していた高橋ゼミと野間ゼミは先生同士が先輩・後輩であったり、学生である大学院生も互いに同期生が多かったりと、ゼミ同士で大変仲が良く合同の飲み会もよくおこなっていた。高橋ゼミは4限、野間ゼミは6限に設定されていたが、飲み会は18時からスタートで自然と野間ゼミは授業をおこなわず飲み会だけという不思議な状態であった。ただし野間先生はこのような飲み会の場でも、私が資料ばかりに頼っているとフィールドの重要性を説き、狭い視野に陥っているとそれを的確に指摘し、研究についての的確なアドバイスをしてくれた。また野間ゼミは終わるのが21時近くだったため、かつては授業後そのまま全員で軽く飲みに行くというのがよくあった。野間ゼミには社会人の大学院生も複数在籍し、そんな時にはその方々の話を聞き学問以外

の世界を教えていただいた。

私の研究の視野を広げてくれたのも野間先生である。今でこそ私の専門分野もアジアの村落・文化・民俗と多少広がりにはしたが、当時の研究は日本の中でも沖縄だけに着目しており、その視野はとても狭かった。そんな時、先生はゼミ生でない私にも声をかけて科研の調査に同行させてくれた。中国で大連からハルビンまで電車で移動し調査したり、韓国での研究会や巡検に参加させていただいたり、これら海外調査を通じてそれまで日本に限定されていた私の視野はアジア全域へ広がった。先生はよく狭い視野の専門家ではなく、大きな視野から全体を見渡せる専門家の重要性を説いていた。同じ教員となってからは一緒に実習を担当することが多く、下見の車中では数時間にわたり地域全体について説明して下さることが幾度もあった。地域を俯瞰的に捉える力がなければあれほど地域の全体像を語ることはできないだろう。

思い起こせば先生の科研調査も、東南アジア、環東シナ海、黒潮の道とどれも視野が広い。同じ研究者になった今でもここまで広い視野を持って研究することはできない。先生の大局から俯瞰し、全体を捉える力は抜きん出ており、まさに天性の地理学者なのだろう。先生からは直接の授業より、フィールドでこそ俯瞰的に地域を見る視野の重要性を教えていただいた。この教えをぜひ引き継ぎながら頑張っていきたい。野間先生、長年のご指導ありがとうございました。

(まつい こういち：本学教授)

野間先生、ご退職おめでとうございます。私の大学時代と言えはまず最初に思い出すのが野間先生です。卒業まで大変お世話になりました。

先生とお話をするとき必ず新たな発見があり、そのたびに自分の考え方や世界観が広がるのを感じていました。私はそれが楽しくて、ワクワクしながら研究室に通っていたのを覚えています。研究室では、ベトナムコーヒーをいただきながら先輩や事務補佐員さんともお喋りをした日々が本当に懐かしいです。そんな心地よい環境で、先生からは卒論のアドバイスとご指導をいただき、お陰様で最後まで夢中になって取り組むことができました。私はここで、物事に本気で取り組む楽しさを学びました。

卒論以外にも、先生の研究やベトナム人留学生の研究のお手伝いなど、院生に近い部分に踏み込ませていただき、刺激的で充実した毎日を過ごすことができました。

「千里地理通信」63号には、私が初めて先生と出会い、先生のお人柄と地理学の魅力に惹かれた日のことを書きました。当時の情熱を忘れないようにしたいと思い、この63号だけは10年以上にわたって大事に保管しています。今回久々に読み返しましたが、私はあの日が転機となり、先生に良い影響を受けながら成長したのだと感じました。先生は私にとっていちばんの恩師です。本当に有難うございました。

野間先生の、末永いご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます。
(2011年3月卒業)

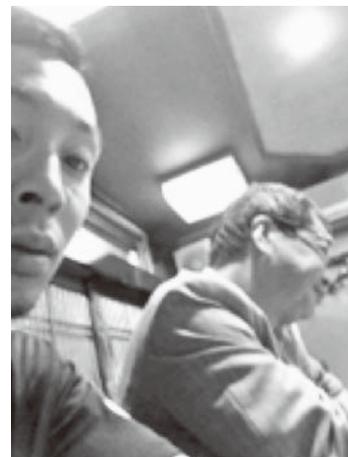
野間先生、この度は御退職おめでとうございます。在学中は大変お世話になりました。私は、単位不足で留年するなど、先生に面倒を掛けてばかりの学生でしたが、卒業まで面倒を見てくださった野間先生には感謝してもしきれません。

野間先生とのいちばんの思い出は、「5年次生」の時に制作した卒業論文です。そもそも留年するほど学業にやる気のない私でしたが、先生が「他の先生を見返そうや。」と鼓舞してくださり、私なりに一生懸命取り組めたことを思い出します。地形図もまともに読めなかった私が、卒業論文が完成してから、もっと深くやりたかったと感じるほど楽しく取り組みました。

制作の中で、先生にお時間を割いていただき、実際に住之江競艇場と尼崎競艇場でフィールドワークを行い、夜は尼崎競艇場近くの小さな居酒屋で、二人で呑んだのを思い出します。

卒業前に先生に感謝を伝えたいと思いましたが、公式の「謝恩会」の参加資格を持っていなかった私は、先生を誘い、梅田の「亀すし総本店」で二人だけの謝恩会を行いました。先生に私なりに感謝を伝えることができたことは、今でも大変良い思い出です。

卒業論文も無事提出し、9月に卒業を迎えた私は、淡々と同級生のいない卒業式に出席しましたが、そんな卒業式を先生がわざわざ見に来てくださり、先生の懐の



尼崎競艇場近くの居酒屋にて

深さを感じました。

当時、競艇選手を夢見て卒業した私ですが、現在は東京で「競輪」に関わる仕事をしています。先生が競艇選手の夢を応援してくださり、進んだからこそ、今の仕事があると思いますし、先生に迷惑ばかり掛けていた昔の私よりは少しまともな大人になれたのかな？と思います。在学中の短い間でしたが本当に有難うございました。これからもお元気でお過ごしください。

(2015年9月卒業)

野間先生には、大変お世話になりました。まずは長きにわたる研究に教育活動、お疲れさまでした。そして、ご退職の日を迎えられましたこと心よりお慶び申し上げます。

野間先生には、地理学の楽しさを教えてもらいました。実際に巡検も野間先生、松井先生のコンビで和歌山県と鹿児島県南さつま市に行きました。ここで私は文献に頼るのではなく、実際に現地へ行き、現地の空気を吸い、現地のメシを食い、現地の人から話を聞く。つま

り、「足で稼ぐ大切さ」を教えてもらいました。実際に私が在学していた時には足で稼ぐすぎた野間先生が松葉杖をついて教室に入ってきたときには、少々心配をしてしまいました。おそらく、ご退職後も研究欲は絶えないとは思いますが、くれぐれもお体を大切にしてください。

卒業論文を書くときには、私がスポーツ新聞を書く部活をしていた関係で「君はサッカーで地理の論文を書きなさい」とゼミのスタートのタイミングで言っていただ

いたおかげで、年間を通しておれず書ききることができました。サッカー王国と呼ばれる静岡県にも1人で現地調査に赴くくらいに楽しみながら研究を進めることができました。あらためて、ありがとうございました。

関大を離れてからも大学院入試のレポートの指導や転職活動の際の推薦状など多くのお願いを引き受けていた

だきました。「地理学を考えるときに、やはり学部段階でどれだけやったかが大切」と直近の食事の際におっしゃっていました。現在は、中学校や高校の教員として働いていますが、地理教育というフィールドで関大地理学教室の卒業生の野間チルドレンとして頑張っています。(2018年3月卒業)

■□教え子から□■

野間先生との思い出

村上 佳美

私は、4回生で離島の食文化について、卒業論文で調査したいと考えていました。野間ゼミに入り、ゼミ生は2名。どの島にするか悩んでいた時、(まるでダーツの旅のように?)「この島いいんじゃないか!」パッと開いたページに載っていたのが、高知県宿毛市にある沖ノ島。島内に土佐と伊予の国境があり、両方の食文化が融合しており、大変興味深く、そのご提案をお受けした次第です。宿毛市まで夜行バスと船で移動し、12時間以上。サンゴ礁に囲まれた大変美しい島でした。市役所や観光協会や現地の旅館の方にもご協力いただき、大変有意義な体験となりました。

私にとっては、僻地でしたが、野間先生はそんな風を感じておられないのでしょうか…大阪から、駆けつけてくださり、一緒に調査をしていただきました。1泊して、

そのまま別の場所へ調査に行かれました。(フットワークの軽さに驚き!)その日の夜、旅館の食事がいつもより豪華に!!聞くと、野間先生から旅館の方に「卒業論文で頑張ってるので、美味しいもの食べさせてやってください。」との心遣いが。とても感動したことを今でも覚えています。

地理学教室にいた時は、本当にお世話になりました。今でも友人たちと、地理学教室にいた時の話で大いに盛り上がってます!姫路のフィールドワークや与論島での調査など、先生方や友人たちと過ごした時間は、一生の宝物です。

本当にありがとうございました。長い間、お疲れさまでした。

(2008年3月卒業、旧姓:久保)

■□教え子から□■

仰げば尊し

浅野 祐斗

野間先生、ご退職心よりお祝い申し上げます。私が野間先生と初めてお会いしたのは、推薦入学者対象の導入講義でした。当時、私はまだ高校3年生で、初めて関西大学の地に足を踏み入れた日ということもあり、少し緊張していたことを覚えております。そんな中、講義開始時刻を10分経過しても、野間先生が一向に現れず、私が緊張のあまり教室を間違えたのかと思うほどでした。その後、野間先生が無事に到着されて講義が始まるのですが、その授業スタイルが大変興味深く、私は野間ワールドに吸い込まれ、この時、専修分属で地理学に進もうと決意した瞬間でもありました。おそらく、私の遅刻癖は野間先生譲りだと思えます。

野間先生と出会って約5年、大学3年次から野間先生のゼミに所属し、同期の中では最も長く、そして一番濃

いお付き合いをさせていただいているつもりです。野間先生との思い出は数多くありますが、やはりいちばんの思い出は、昨年2月から3月にかけて実施された「ベトナム研修プログラム」です。初めての海外渡航ということもあり不安でしたが、野間先生が現地の方々積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿を見て、これが本来のフィールドワークの姿だと気付かされました。また、水上人形劇の鑑賞やハロン湾クルーズなど、貴重な体験をご一緒させていただきました。本当にありがとうございました。

野間先生のことなので、退職されてからも休むことなく常に動き回っておられることだと思います。これからもお身体に気を付けてお過ごしください。また、美味しいお酒を呑みに行きましょう。(博士課程前期課程1年)

■□教え子から□■

野間先生から垣間見えた生き方

吉村虎太郎

野間先生、長らくの教員生活お疲れ様でした。

私が野間先生の授業を初めて受講したのは関大に入学して間もない頃、この専修へ分属される前の1年次生時代に履修していた「知へのパスポート」(知パス)だったはず。その知パスで野間先生は手引きとして阪神沿線へのフィールドワークを実施されました。フィールドワークの中で阪神沿線の各地について終始笑顔で解説する野間先生の姿は、私の目には地理学という学問を愛し、心から「知る」ということを楽しんでいるように見えました。中学生の頃から大学では地理学を専攻したいと思っていた私ですが、そのときに中学高校とは違う地

理学というものを肌で感じられたと思います。

この専修へ分属されて2年、野間ゼミの一員となって1年が早くも経とうとしていますが、野間先生には様々な事でお世話になりました。それは講義やゼミなどに限らず、淡路島巡検の晩になぜか数名とカラオケに行き十八番を聞かせていただいたことや、天神祭の花火を天満橋の先生のお嬢様宅から見させていただいたことなど多岐に渡ります。これからの人生もお体に気をつけて、そして楽しい日々を送られることを願っております。

(学部3年次生)

地理学専修と現在

米本 千夏

私は関西大学文学部地理学・地域環境学専修を卒業後、農業機械メーカーを支える総合物流会社で勤務しています。

そこでは、農業機械や建設機械、ポンプ、バルブなどの社会・産業の基盤となる商品の運送取扱と倉庫管理を基盤とした豊富な知識を基に、様々な取引先からアウトソーシングを請負しています。私の担当は、物流管理職として、建設機械部門生産ラインの指定の場所に各種部品の必要な数量を必要な時間に納品するためのモノの管理、コスト低減・品質向上などの改善提案をしております。

私は大学1年次生の冬、新型コロナウイルスの影響により、学生生活のほとんどはマスクを着用し、緊急事態宣言や営業時間の短縮、オンライン授業などの外出制限の中で過ごしました。地理学専修はフィールドワークが醍醐味であるため、実習に行きたくても行くことができないという歯がゆい日々を過ごしました。しかし、そのような状況の中でも、先生方のご指導、ご尽力のおかげで、バス巡検や宮城県調査報告書の作成、4年次生では琵琶湖一周やベトナム研修も経験することができました。

ベトナム研修では、ハノイ旧市街地やタンロン遺跡、ハノイ大教会、水上人形劇鑑賞、ハロン湾クルーズなど9日間でその土地特有の衣・食・住の文化に触れることができました。海外に行くのは今回



写真1 ハロン湾クルーズ



写真2 ベトナムの街並み

が初めてでしたが、海外へ何度も訪れている先生方がいたおかげで安心して研修を受けることができ、また交通事情の悪さや、街の治安、衛生面などの現実を肌で感じ、日本の良さを再認識した研修にもなりました。

ゼミでは野間晴雄教授のもと、「滋賀県における伝統的カブ類の生産・流通、種の保存と継承」というテーマで卒業論文を執筆しました。それまでコロナの影響で現地での聞き取り調査をあまりしていなかった私にとって、卒業論文のための現地調査は不安も多くありました。しかし、滋賀県のJAグリーン近江の方々、農家の方々、教授の協力もあり、無事に書き上げることができました。現地調査では本や論文では出会うことのできなかった調査対象地域の現状・課題を知ること、また地域の方々のコミュニケーションの大切さなどを学ぶことができ、とてもよい経験になりました。

地理学専修で滋賀県の農業について卒業研究を進めるうちに、その地域における農業の重要性を感じ、生活に必要な不可欠なものに関わる仕事がしたいと思い、就職いたしました。そのため、現在は建設機械部門に所属していますが、将来的には農業機械部門で物流面から農業を支えていきたいと考えております。弊社の社長も私と同じ、地理学専修の卒業生で、持続可能な社会の実現を目指し、事業を通じた環境・社会課題の解決に向けた取り組みを推進しています。特に2024年問題の課題解決、エコ検定取得による社員一人ひとりの環境問題に対する意識向上、トラックの排気ガス削減を目指しています。そのような地理学と密接に関係する会社で、大学時代に学んだ現地調査での分析方法を活かし、これからも現場の現状を知り、課題を見つけ、その課題に対して改善活動を行うことで成果をあげられるよう精進する所存です。
(よねもと ちなつ：クボタロジスティクス株式会社, 2023年3月卒業)

2024年度教室行事予定 (2024年4月～2025年3月)

4月11日(木)	専修オリエンテーション	A301教室	12:15～12:55
4月25日(木)	新歓コンパ		18:00～
5月11日(土)	～12日(日) 一泊バス(12日)巡検	丹波篠山 松井・筒井担当	
7月7日(日)	大学院M・D入試(秋学期入学), 春学期大学院M学内進学試験		
7月20日(土)	大学院合同演習(梅田キャンパス)		
9月26日(木)	卒業論文中間発表会		
9月29日(日)	日帰り巡検(奈良市・大和郡山市)	卒業生も参加可能, 土屋・筒井担当	
10月1日(火)	～5日(土) 地理学実習巡検(会津若松)	松井・筒井担当	
10月6日(日)	大学院M・D入試, 大学院M学内進学試験		
12月7日(土)	関西大学史学・地理学会大会(関西大学)	卒業生も参加可能	
12月14日(土)	第6回千里地理学会大会(関西大学)	卒業生も参加可能	
2月22日(土)	大学院M・D入試, 大学院M学内進学試験		
3月19日(水)	卒業式		
3月21日(金)	学位記授与式(M・D)		

関大地理同窓会 令和5年度会計報告

(収入)	(円)
令和4年度生卒業時會費(2名)	4,000
新入生會費(34名)	34,000
一般會費(1名)	1,000
卒業生會費(3名)	6,000
寄付金(2名)	55,000
計	100,000
(支出)	(円)
千里地理第88号發送代	11,640
千里地理第89号發送代	14,560
ジオグラフィカ千里2号發送代	6,369
事務局アルバイト代	5,000
計	37,569
(収支残高)	(円)
前年度繰越金	410,171
収入-支出	62,431
計	472,602

〈同窓会事務局ニュース〉

- 12月9日（土）に関大地理同窓会総会を開催し、会則の制定、会長ほか役員の方の委嘱、中間会計報告が審議され承認されました。
- 関大地理同窓会会長に三好唯義氏が推薦され、総会にて承認されました。他の役員の詳細は別項をご覧ください。
- 関大地理学教室の卒業生である次の方々から寄付をいただきました。大倉 俊、武田 充（50音順、敬称略）
- 大倉 俊氏（株式会社ノエビアホールディングス代表取締役社長）からの寄付金を、教室の巡検、実習、調査、研究成果報告、同窓会事業に幅広く利用できるよう「大倉奨学基金（仮）」の設立を計画しております。
- 今年度の卒業生の主な進路は以下の通りです。(株)アジア航測、四国旅客鉄道株式会社、大同信号株式会社、ティプス株式会社、ハマヤ株式会社、京福電気鉄道株式会社（50音順）
- 2023年度同窓会連絡員に塩谷唯さん、松田治樹さんが選ばれました。
- 同窓会通信の執筆寄稿を募集しております。1 ページ 1600 字程度、半ページ 800 字程度、写真等も可です。執筆いただける方は教室メールアドレス [kandaichiri@gmail.com] までご連絡ください。また、会費の納入状況などのお問い合わせも上記メールアドレスにお願いいたします。

役員一覧 *任期は全て2年

【会 長】三好唯義

【協 議 員】石川雄一、上野 裕、小野田一幸、貝柄 徹、鈴木応男、埴田祐子、辻 康男、西岡尚也、東出修一、舟越寿尚、堀内千加、松田順一郎、吉兼崇博、吉田雄介、矢野司郎

【幹 事】木場隆弘、齋藤鮎子、田中優生、直暁陽、中井香月、松井僚平、安田えり

【会計監査】中島 茂、矢嶋 巖

【顧 問】渡邊 登

【事務局長】松井幸一

大学院生の研究業績（2023年4月～2024年3月）

【論文・書評・書籍等】

楊 珺屹 「中国湖南省の省民性と発話イメージ形成に関する地理学的研究」史泉、第138号、1-19頁、2023年7月

楊 珺屹 「今帰仁村謝名における伝統的集落景観の構造理念」ジオグラフィカ千里、第3号、2024年3月

【学会・研究会発表】

潘 多 「木津川流域における水利用のための天井川と微地形」2023年度関西大学史学・地理学大会（口頭発表）、2023年12月2日

劉 天星 「中国重慶市における近代化遺産の特性と保存・活用状況に関する研究」2023年度関西大学史学・地理学大会（口頭発表）、2023年12月2日

楊 珺屹 「沖縄県国頭郡今帰仁村謝名における集合的記憶の構築」2023年度関西大学史学・地理学大会（口頭発表）、2023年12月2日

徐 雨辰 「17世紀におけるジャワ島の伝統製糖業の展開—オランダ東インド会社と中国移民」2023年度関西大学千里地理学会（口頭発表）、2023年12月9日

潘 多 「木津川中流域における天井川の発達過程から見る自然災害の特徴」自然災害研究協議会西部地区部会（口頭発表）、2024年3月1日（予定）

田原 和真 「森林組合を中心とした持続可能な林業展開—和歌山県龍神村森林組合を事例に一」2024年日本地理学会春季学術大会、3月19-20日（予定）

潘 多 「木津川流域における天井川の微地形と水利用」2024年日本地理学会春季学術大会、3月19-20日（予定）

楊 珺屹 「沖縄県国頭郡今帰仁村謝名における集合的記憶の構築—グループインタビューの質的分析を通じて—」2024年日本地理学会春季学術大会、3月19-20日（予定）

2023年度 卒業生・修了生 からのひと言

〈卒業生〉

上野 颯

昔から地理が好きで地理学専修に入りましたが、授業や巡検を通して多角的な思考力や探究力を身につけることが出来ました。愉快的な仲間達と過ごした3年間は一生ものの財産です！

神谷 風奈

フィールドワークを始め、この専修で調査方法やアポの取り方、データをまとめて研究することなど多くのことを学ぶことが出来ました。また、地理学を通して自分の興味のあることを勉強出来て楽しかったです。大変お世話になりました。ありがとうございます。

北村 達也

3年間、地理学教室でお世話になりました。コロナ禍でオンライン授業中心の日々もありましたが、出雲での実習調査など、直接的に見聞を広げることが出来てとても良かったです。

久野 拓馬

地理学専修に入りたくて関大に入学し、4年間楽しく学習・研究ができました。お世話になった先生方、先輩、仲間には頭が上がりません。4年間本当にありがとうございました。

塩谷 唯

地理学専修の先生方や素敵な仲間に出会えて、3年間がとても楽しく、充実したものとなりました。ありがとうございました！

隅田 尚亮

地域調査や卒業論文など、これまでの活動を通して、さまざまな知識を得ながら地理の魅力を追求することができたと思っています。

西 温紀

実習調査では、聞き取り調査やアンケート配布など自らデータを取りに行く経験ができたことで、地理学の基礎的な調査手法を体感することができました。3年間ありがとうございました。

天井川の発達過程から見た自然災害と水利用の特徴

—木津川流域を例に—

潘 多

1. はじめに

沖積平野では、周囲の人々の暮らしている場より河床が高い河川を天井川と呼ぶ。流域面積 79 万 5 千平方キロメートルの黄河が、来日前に知る唯一の天井川だった。ところが、日本では、全国に天井川が分布している。天井川の独特な景観は、河床下に道路トンネルがあることでも知られている。中国と日本の天井川のスケールや形態は大きく異なるが、両国とも古来より天井川がもたらす自然災害に悩まされてきたことは共通している。

修士論文では、京都府木津川流域で天井川を持つ支流における、様々な地理情報解析を行い、現地調査の結果を踏まえて、自然災害と河川地形との関連性、農業利用と河川地形との関連性、河川改修と河川地形との関連性を明らかにした。さらに、防災の視点を考え、天井川を安全に経済的に利用するための注意点を地理学的に明らかにした。

論文での考察は、①天井川の形状の違いを作った地形的な背景と自然災害、②天井川の形状の違いを作った人為的な背景と自然災害、③天井川の利用の違いが生まれた地形的な背景とした。そのうち、①と②の一部について紹介する。

2. DEM から求めた地形断面

現地調査では、レーザーを使って天井川の断面を測量した。その時、天井川の河床に対する天端や平野面の比高に木津川本流で見た上下流方向での違いがあるように思われた。そこで、5mDEMを用いて、天井川の断面の特性を解析した。

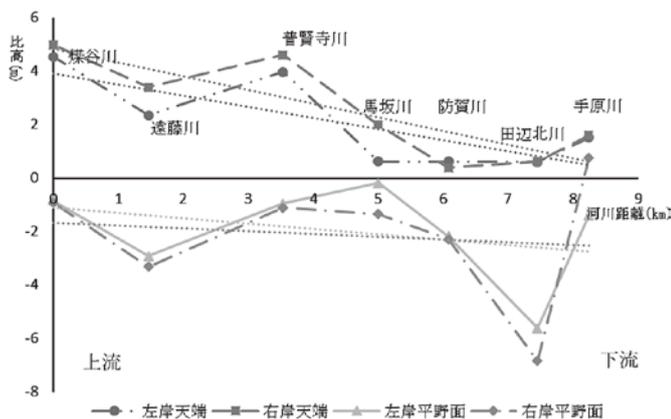
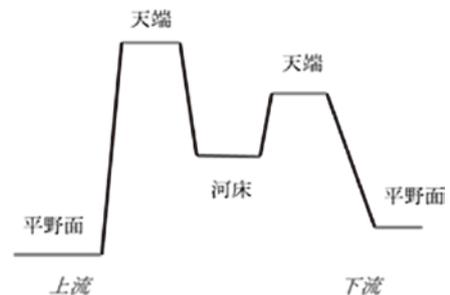


図1 計測点 500m の地形断面の特徴 (左岸)

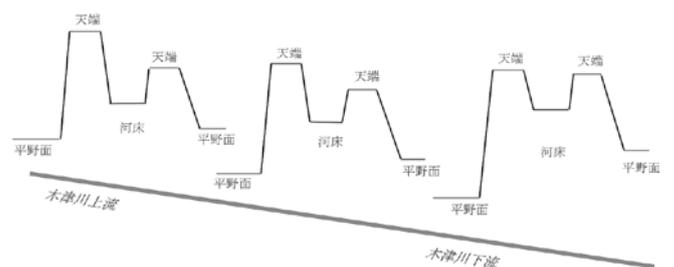
解析は、木津川本流の中心より各河川の上流方向に 250m と 500m を計測点とした。各河川の計測点の間の直線距離を測り、直線距離を加算して河川距離とした。次に、QGIS の地形プロファイル機能を使って、計測点を中心とする地形断面図を作成した。各河川の地形断面図から、左右岸の天端、平野面、河床の高さを計測した。Excel で天端と河床の比高、平野面と河床の比高を計算し、木津川の河川距離に対する比高のグラフを作成した。

図1は、木津川左岸について、計測点 500m の地形断面から求めた比高を河川距離に対して示す。各河川の右岸天端が左岸天端より高い傾向がある。各河川の左岸平野面は右岸平野面より高い傾向がある (比高が小さい)。木津川右岸では、各河川の左岸天端が右岸天端より高い傾向がある。右岸平野面が左岸平野面より高い傾向がある。実際、計測点 250m の結果は図1と、または右岸ともほぼ同じ傾向を示している。

さらに、天端と河床の比高は下流ほど小さくなり、平野面と河床の比高は下流ほど大きくなる傾向がある。計測点 500m では、250m に比べると、上下流方向に見た比高変化の傾向がよく見える。右岸でも同様である。この解析を通じて、図2の支流と木津川区間別に見た地形断面モデルをまとめることができた。



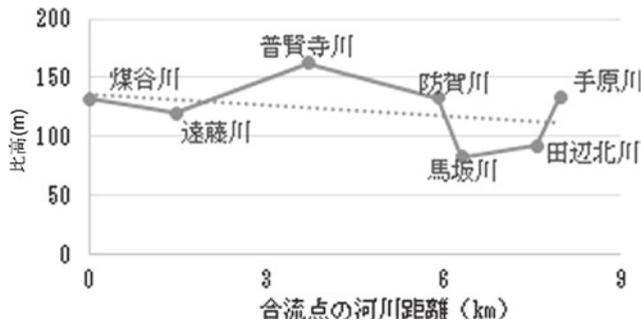
(1) 基本断面構造



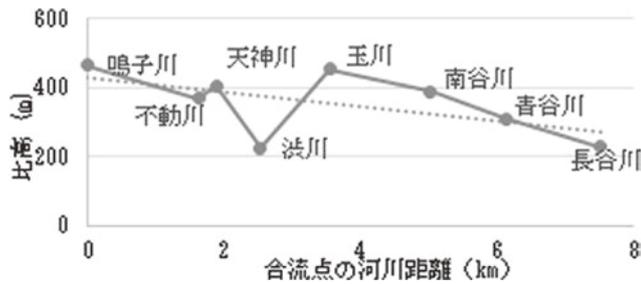
(2) 木津川区間別に見た天井川の断面構造
図2 支流と木津川区間別に見た地形断面モデル

3. 天井川区間の土砂体積に関する推測

天井川の地形特徴とその成因を考察するためには、侵食と堆積の関係をはじめに確認する必要がある。そこで、侵食については、流域界の比高と流域面積から、堆積については、天井川の土砂体積から検討を進めた。天井川の土砂体積は、計測点 500m 地点の地形断面積を計算し、その値に天井川の延長を乗じて求めた。



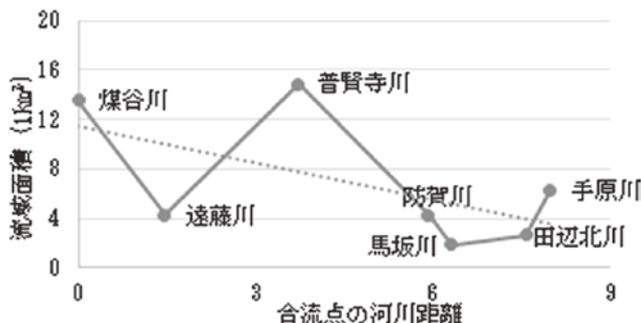
(1) 左岸



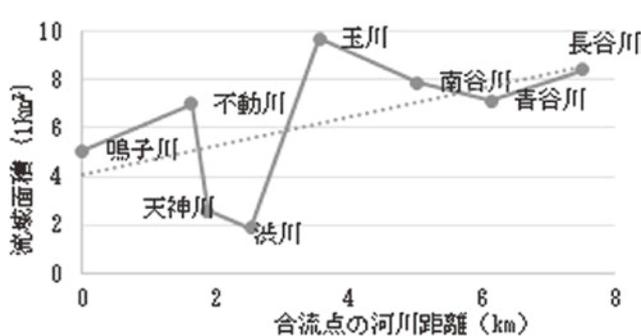
(2) 右岸

図3 流域界の比高

図3は、各河川の流域界最高標高と最低標高の比高を合流点の河川距離に対して示した。(1)左岸、(2)右岸共に、上流から下流に向かって、比高は次第に小さくなる傾向がある。



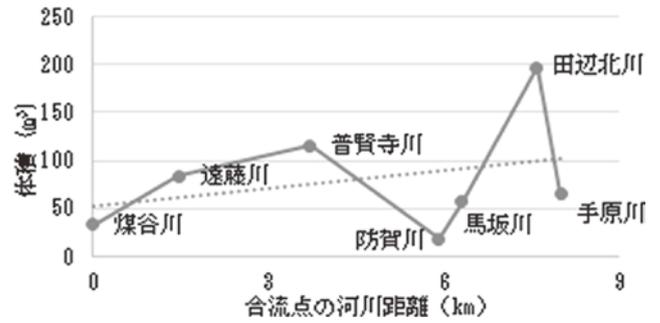
(1) 左岸



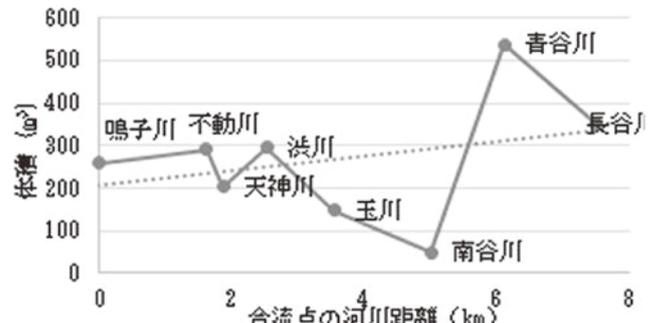
(2) 右岸

図4 流域面積

図4は、各河川の流域面積を合流点の河川距離に対して示した。(1)左岸は、上流から下流に向かって次第に狭くなる傾向があり、(2)右岸は、次第に広くなる傾向がある。右岸の天神川と洪川は、河川の長さが極端に短いため、流域面積も狭くなって、傾向から大きく外れている。



(1) 左岸



(2) 右岸

図5 天井川区間の土砂量

図5は、天井川区間の土砂量を合流点の河川距離に対して示す。推測値ながら、(1)左岸と(2)右岸共に、上流から下流に向かって、次第に土砂量が多くなる傾向がある。左岸で、防賀川の土砂量が極端に少ない原因は、天井川の撤去工事による。右岸で、玉川と南谷川の値が極端に小さい原因として、天井川が短いこと、段丘が発達することが考えられるが、さらに検討が必要である。

図3と図4からは侵食量の違いを、図5からは堆積量の違いを、上下流方向で検討できた。本論文全体では、兩岸の天井川の地形発達の違いについて、山地の地形形成からさらに考察を進めている。

4. まとめ

天井川の地形の基本形状は、教科書通りのものだが、木津川本流の上下流で見ると、規則的に変化していることがわかった。

その地形形状と自然災害の発生の型、その地形形状と歴史的な農業用水路の形成については、本論文中で詳しく述べている。

(ハン タ：博士課程前期課程 2024年3月修了)

野垣光希

地理学専修の一員として、また野間ゼミの最後の卒業生として、充実した3年間を過ごすことができました。ここで得た経験を今後の人生にも活かしていく所存です。本当にありがとうございました。

松田治樹

大学生活は意外と早く終わってしまうものです。人生の夏休みかと思っただけで、やってやりたい事をやっておくことをお勧めします。悔いのない大学生活を。

森川弘世

野間ゼミ最後の学生として、地理学専修の学生としてとても充実した3年間を過ごすことが出来ました。経験を通して得たものを自分の力で発展させ、活かしていきたいとおもいます。ありがとうございました。

吉岡加帆

3年間お世話になりました。巡検はどれも貴重な経験でしたが、特に島根県でのフィールドワークは有意義な時間を過ごせたと思います。地理学に入って楽しい学生生活を過ごすことができました。ありがとうございました。

酒井凜平

自分は途中で2年休学してたので、6年も土屋先生はじめ、教授の皆様には大変お世話になりました。たくさん迷惑もおかけしました。すみません！本当にありがとうございました。

和田多生

面白い人間と出会えてよかったです。地理学で学んだことを活かして旅行を楽しみたいです。

(大学院修了生)

潘 多

関大での3年間は、これまでの人生の約8分の1に相当する。一番好きなことは、研究室から見下ろし、一年を通して移り変わる季節を眺めることだった。みなさん、いつもありがとうございました！

張 然

関大地理学教室で学んだ2年間、いろいろな友達と出会い、たくさん知識を学びました。先生と教室の学生たちについて行って、日本各地での巡検や調査をしたとき、見識が増えました。

■ □ 学窓から □ ■

関大の地理教室での3年間と地理学の認識

張 銘珊

私の出身は中国の黒龍江省である。2015年から2019年まで内モンゴル師範大学の歴史文化学部で文化産業管理を専攻し、歴史、管理、観光、メディアなどの基礎知識を習得した。内モンゴルは中国の内陸部に位置し、北東から南西に走る細長い形で、中国で3番目に広い面積を持つ。その広い国土は、草原をはじめ、森林、湖沼、砂漠などの壮大な自然風景が広がっている。また、豊かな少数民族の歴史文化も生み出した。しかし、豊富な観光資源に恵まれているにも関わらず、その観光業の発展がほかの都市と比べると遅れている。

大学で「文化資源」ということばをはじめて学んだ。「文化資源」は新しいことばで、人間が生み出してきた多様な文化の総体を資源として捉える新しい概念で、文化行政や観光、地域活性化との親和性が高いと理解している。地域観光の振興のために、その文化資源をどのように発見・活用するかが重要である。自分の卒業後の進路を考えて、観光産業が発達している日本で文化資源の活用について引き続き学びたいと思った。また、日本の歴史、文化も体験したので、日本に留学することにした。

2019年7月に内モンゴル師範大学を卒業した後、大阪のメリック日本語学校で1年半ほど日本語を学んだ。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、日本語学校の授業はほとんどオンラインで行われ、また遠距離の旅行もあまりできなかった。当時、私は大阪市の浪速区下寺に住んでいて、余暇にはよく周辺の神社や寺を散歩した。

2021年4月に関西大学文学研究科・地理学専修の研究生として、基本的な地理知識の学習を始めた。実は、関西大学の研究生制度では所属学部科目のみならず、所属研究科の授業も聴講できるので、勉強する上では非常にありがたい。ここで、修士2年研究の土台を作ることができた。私は文系の出身なので、地理との出会いは中学校である。また、高校時代に自然地理を中心に、中国と世界の地理を学んだ記憶が残っている。一方、関大の地理学教室で人文地理を中心に、諸知識を身につけた。関大でe-stat政府統計データの活用を勉強し、地理院地図や今昔マップなどの地図のサイトに接触し、QGISやMANDARAなどのソフトを使うことができた。

フィールドワークは地理学にとって欠かせない存在である。関大の地理学教室においても、フィールドワークは重要な要素である。日帰りやバス巡検では楽しみながらさまざまな地域の特性を読み取ることができる。4泊5日の実習

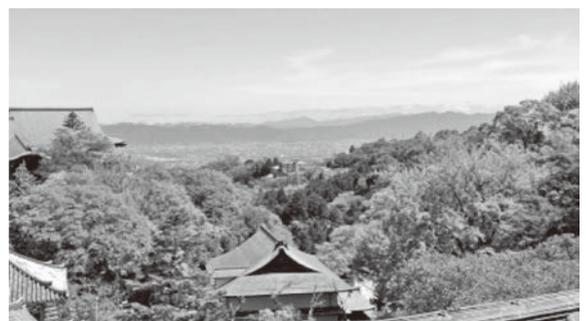
調査に参加した一年間で、情報の収集から、調査対象との連絡、現地での聞き取り調査、最終報告書の作成まで、貴重な経験ができた。また、たくさんの楽しい思い出もできた。地理学は自然環境と人間との関係を研究する学問であり、私たちの日常生活と密接に関係していることを、私は3年間の勉強で学んだ。お世話になった地理学教室で諸先生と大学院生、学部生の皆様には感謝を申し上げる。

入学の当初、内モンゴルの観光と文化資源の活用についての研究を行うつもりだった。しかし、コロナが原因で帰国が難しかったことから、テーマを変更した。地理学は、実は他のどの学科よりも幅広い学問分野である。研究中で困った時もあるが、野間先生の御指導のもとで研究を続けることができた。そういった幅広い範囲の学問ではあるが、自分の好奇心を働かせて日常生活の中で自分なりに地理の魅力を発見することが重要だ。最初は日本の神社仏閣に興味があった。授業の巡検で鉄道の魅力を感じて勉強が進むにつれて、自分の研究の方向は変化した。

私の修士論文は生駒・高野山・比叡山の社寺参詣を対象に、関西私鉄沿線における文化資源について研究している。20世紀以降に誕生した日本の私鉄は発達した。その神社仏閣や名所旧跡などの観光地への輸送という機能に注目し、地理学の視野から今昔の沿線観光資源を発掘・比較し、その文化資源がいかに創造、発掘、活用されてきたかの軌跡を明らかにする。実際には論文を考えながら、鉄道に乗って生駒・高野山・比叡山などの研究地域をフィールドワークした。現地で自ら研究の認識をより深めた。

地理学では、様々な観点から物事を捉えて考えることが重要である。地理学教室での3年間、楽しいことも悲しいこともあった。初日の授業が昨日のこのように思い出される。地理知識だけでなく、これから先も挑戦し続ける勇気も学んだ。ここで、改めて野間先生と地理教室の皆様へ感謝を申し上げたい。

(チョウ メイサク：博士課程前期課程 2024年3月修了)



生駒山上から大阪平野をのぞむ (2022.4.20 撮影)

■ □ 日帰り巡検報告 □ ■

岸和田と貝塚
—泉州中核部の自然、産業、歴史景観—

巽 愛華

2023年10月1日(日)に「岸和田と貝塚—泉州中核部の自然、産業、歴史景観—」というテーマの日帰り巡検が実施された。今回は、2年次生が事前に作成した資料を基に各々に与えられたテーマについて説明をしながら、岸和田市と貝塚市で巡検が行われた。以下、各テーマの担当の説明を元に、岸和田、貝塚の自然、産業、歴史景観を記し、感じた思いを述べたい。

JR久米田駅で集合し、JR阪和線や泉州中部の地形について説明を受けた後、久米田池へ向かった。久米田池は三方を自然地形の台地に囲まれており、残りの一方(久米田公園～久米田寺山門側)に堤防を構築して作られた灌漑ため池である(写真1)。大阪府内のため池の中で最大の水面面積を誇る。実際に久米田池を間近で見たとき、池と言われなければ、湖と勘違いしてしまうほどの広さであった。また、久米田池は「鳥の国際空港」と呼ばれている通り、多種多様な鳥が水面を泳いでいたり、周辺を飛んでいたりする場面を目にした。



写真1 久米田池にて

次に、JR下松駅から一駅先のJR東岸和田駅で下車し、泉州卸商業団地、和泉高校を通過して、南海岸和田駅へ向かった。泉州卸商業団地では、精肉や海産物、青果などの食品から日用雑貨や料理道具など様々なニーズに合わせた商品を取り扱っている。泉州卸商業団地は、業者のみではなく、一般人でも箱で安く買うことができ、子供会のお菓子を買うときなどにも利用されているようだ。私たちが巡検に行った日はシャッターが閉まっており、中の様子や賑わいを見るのが出来なかった。

南海岸和田駅に到着した後、岸和田駅前通り商店街で一時解散し、各自で昼食。のち、きしわだ自然資料館で再び集合した。きしわだ自然資料館は3階建てで、1階には、生きた魚などを飼育している水槽コーナーや、大阪湾の埋立地「夢洲」でこれまでに見られた鳥をはじめとする生き物たちを、多数の写真や絵画で紹介しているコーナーがあった。2階では、岸和田市を中心とした大阪南部・泉州地域の自然のことを、多くの実物標本や模型、ジオラマなどで紹介している。また、きしわだ自然資料館生まれで、いまや全国レベルの人気を誇る学習プログラム「チリメンモンスター」を紹介するコーナーがある。チリメンモンスターとは、ちりめんじゃこの中に入っているえびや貝の仲間などの小さな生き物のことである。3階では、野生動物の剥製を100点以上展示している。きしわだ自然資料館ができるきっかけは、もともと個人で博物館を経営していた人が野生動物の剥製を市に寄贈をしたいという話からである。

その後、岸和田だんじり会館に向かった。ここでは、大画面で迫力満点の岸和田だんじり祭の映像を見ることができた。今回巡検で訪れた南海岸和田駅、蛸地蔵駅周辺の岸和田地区だんじり祭は本宮が9月17日に行われていたので、見るができなかった。また、JR久米田駅周辺の八木地区、下松駅周辺の南掃守地区、東岸和田駅周辺の東岸和田地区のだんじり祭は、巡検の日に試験曳きが行われていたが、こちらも見るができなかった。画面上でも地車のやりまわしの迫力があつたため、今回の巡検で実際に岸和田だんじり祭の地車のやりまわしを目の前で見ることができなかったのが非常に残念である。館内では、地車を近くから見るができ、細部まで細かい彫刻が施されているのを見ることができた。また、地車の大屋根に乗る体験や、地車囃子の鳴物の体験をするコーナーもあり、実際に体験している人もいた。

その後、岸和田城へ行き、岸和田城下町や岸和田城の説明を受けた。岸和田城の石垣は野面積みという自然石をほとんど加工せずにそのまま積み上げて、石垣を作っていく積み方であるという説明を聞いた。実際に石垣を見てみると、大きさも形も異なる石がバランス良く並べられており、私が想像した大きい石を四角く加工され、均等に並べていく石垣とはかなり異なることが分かった。あまり加工を施していない石で石垣を作り上げていく技術は並大抵ではないと感じた。岸和田城の天守閣にのぼると、岸和田城の目の前にある庭園の全体像を見ることができた。地上から見たときは、綺麗に並べられた白い石や何カ所かに集められた石の形などに目が行っていたが、天守閣にのぼり上から全体をみると、庭園自体の独創的な形がまず目に飛び込んできた。天守閣から見るのと地上から見るのとではまったく違った印象を受けた。この庭園は、八陣の庭と呼ばれ、昭和28年に作庭家の重森三玲氏によって作庭された。その芸術上の価値及び近代日本庭園史における学術上の価値が高いことから、平成26年10月6日付で国の名勝に指定された。

岸和田城を見学した後は、自泉会館と五風荘、岸城神社の前を通過して、南海蛸地蔵駅へ行き、南海貝塚駅まで乗車した。南海貝塚駅の隣には、水間鉄道貝塚駅があり、今回は運良く水間鉄道の写真を撮ることができた。そして、南海貝塚駅から古い町並みが残る貝塚市の寺内町を通りながら願泉寺に向かった。願泉寺に伝わる慶安元年(1648)に描かれた町絵図を見れば、貝塚市の寺内町は当時の町割り(道路網)や寺社がその姿を現在にそのまま引き継がれていることがよくわかるようだ。貝塚市の寺社の建物や町家の多くは、長い年月を通じ守り伝えられてきているのだと知った。

願泉寺の前では和泉地方や貝塚市のことなどについて説明を受けた。貝塚市はつげ櫛が特産品として知られ、和泉櫛とも呼ばれ、経産大臣指定伝統工芸品に指定されている。貝塚市のつげ櫛は全国において、そのシェアは7割に上り、つげ櫛生産において代表的な産地であると

張 銘珊

関大での3年間は貴重な経験をさせていただき、充実した修士生活を送りました。地理学教室の先生方と院生、学部生たちに恵まれ、一緒に過ごした日々は、私の人生の宝物です。本当にありがとうございます。

楊 瑤屹

研究生の頃からお世話をおかけした松井先生をはじめ、ご指導いただいた先生方に心から感謝申し上げます。これからの3年間も何卒よろしくお願いたします。同じ時代を共に学んだ学生同士は、未来を信じて頑張ってくださいませ！

新専修生からの ひと言

大学院 (秋学期入学)

肖 逸欣

(博士前期課程)
初めまして。中国河北省の出身です。地理学専修に入ってとても楽しいです。日中両国のコンビニに関する研究を行っています。これからの2年間、どうぞよろしくお願いたします。

王 競東

(大学院研究生)
元々人文地理とフィールドワークに興味を持ちますので、地理学科に入りました。現在、私は修士に進学するために頑張っています。先生のご指導ご鞭撻のほどお願いたします。

いえる。全員の説明が終わった後そのまま願泉寺で解散となった。

今回の巡検では、2年次生が初めて資料作成から当日の説明に至るまでを行った。話を聞くだけでなく、自分たちで書籍やインターネットを用いて、それぞれのテーマについて調べ発

表したため、より知識が深まったと感じた。また、現地に訪れ、1日かけて、自分たちの足で岸和田市と貝塚市のフィールドワークをすることで、泉州中核部の自然や産業、歴史景観について、理解することができたと考える。

(たつみ まなか：学部2年次生)

■ □ 実習調査報告 □ ■

熊本県熊本市での実習調査

平井 杏周

2023年度の実習調査は熊本県を対象として行われました。期間は10月3日から10月7日までの5日間です。松井先生、黒木先生の指導の下、大学院生4名と学部生20名が「低地農業」「高地農業」「産業」「歴史・文化」「観光・交通」「自然・文化財」の6班に分かれ、現地調査に臨みました。

春学期は調査の準備を行いました。まず、希望を募って班と課題を決めた後、文献やインターネットでの情報収集を行いました。その後、実際に現地で行うアンケートを作成したり、聞き取り調査の内容を考えたりしました。私の所属する高地農業班ではミカンの流通について調査することになったため、論文や書籍などから情報を集め熊本のミカンについての知識を蓄えました。自分たちで調査を計画し実施することは初めての経験で、分からないことばかりで本当に困り果てましたが、どうにか熊本県の「河内みかん」を対象に先行研究をなぞるかたちで聞き取り調査やアンケート調査を行うことを決めました。

現地調査は、日中は班ごとに調査を行い、夜にその日の調査結果と翌日の予定を全体の前で報告する、というスタイルで行われました。私たちの班も例に漏れず調査に繰り出したのですが、そこで待ち受けていたのはさらなる試練の連続でした。実習最初の調査で訪れたスーパーでは聞き取り調査中、1分近く全員が沈黙する状況をつくってしまいました。聞き取り調査を行う農家の住所をしっかりと確認しなかったために到着した場所がただの山の中だったこともあり、他にも本当にたくさんの失敗をし、多くの人に迷惑をかけました。しかし、そこで出会ったのは本当に優しい人ばかりでした。スー

パーではミカン農家とスーパーの関わりについて細かく教えていただきました。スーパーと農家の関わりは事前調査で予想していた内容とは大きく異なり、現地調査の重要性を実感できました。また、

農家では従来の流通経路だけでなく、ふるさと納税や海外輸出などの新しい方法についても教えていただきました。田崎市場では、市場の役割について問い、その詳細を知ることができました(写真1)。ミカン流通の中核を担う田崎市場での聞き取り調査は大変参考になるものでした。想像より広い地域最遠は約50km離れた山鹿市から田崎市場ミカンが運び込まれおり、驚いたことを記憶しています。ここには書ききれませんがその他の場所でもいろいろな方にお世話になり、私達はなんとか調査を終え、現在は報告書の作成段階に入っています。

自分たちで調査を計画し実施することは想像の何倍も難しく、思い通りに行かないことの方が多かったです。しかしその分、聞き取り調査がうまくいったり、調べていた内容が自分の頭の中でつながったりしたときの喜びは大きかったです。この4泊5日の実習では本当に貴重な体験ができました。情報収集、アポイントメント取得、聞き取り調査などの技術や現地調査のメンタリティーはこの実習がなければ知ることはなかったでしょう。今回の学びを決して無駄にしないようこれからの毎日を生きていこうと強く思いました。(ひらい あんしゅう：学部3年次生)



写真1 田崎市場にてせりの説明を聞く様子

2023年度 実習調査報告書 No.48 『熊本県熊本市の地理』 目次

はしがき

I 地域の概観

II 低地農業の実態と課題

III 西区のみかん流通の実態

IV 熊本都市圏における産業・商業・工業と地域の変化

V 水がはぐくむ歴史・文化

VI 熊本県の交通と観光

VII 熊本地震における文化財被害と防災

各章の要旨

調査日誌

編集後記

関西大学史学・地理学会 2023年度大会ポスター発表資料

英文目次

関西大学文学部地理学・地域環境学教室発行、2024年

3月刊、全134頁

教室だより

■2023 度秋学期は、新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが当初から5類にある学期となった。このため、コロナ禍以前の教室運営に戻り、秋の日帰り巡検に続き地理学・地域環境学実習も例年通りに実現され、調査報告書も3月刊行に向かいました。しかし通常にはないイベントが多く実施された特別な学期ともなりました。一つは日本地理学会であり、一つは野間先生古稀退職記念行事です。なお、4月に野間教授に代わり追手門学院大学の筒井由起乃先生が教授として着任予定で、教室運営は黒木、土屋、筒井、松井の4名体制に変わります。

■日本地理学会秋季学術大会

9月16～19日に日本地理学会が関西大学にて開催されました。16日は、午前中にミニ・エクスカーション「鉄道のまち吹田のいま」(市民向け公開巡検)(案内4人、参加者16人)、午後公開講演会「大阪・吹田再発見—古環境、歴史風土、都市のかたち—(市民向け公開講演会)(講演者3人、参加者97人(対面75名、オンライン22名))が行われました。17日と18日は口頭発表(108件(2件キャンセル))とポスター発表(41件)が行われました。17日には、コロナ禍の間中止されていた懇親会を4年ぶりに実施できました(参加者は177人)。19日は、「巡検第1班:北摂地域の郊外開発とその変貌」(案内4人、参加者18人)、「巡検第2班:「荘園絵図の里」日根野と「九条政基旅引付の里」大木の文化的景観と自然環境、地場産業」(案内5人、参加者13人)が行われました。期間4日間の最高気温の平均は約33.7℃(大阪市)で、全日が晴れて熱帯夜と、大変暑い大会となりました。実行委員会10人、学部生(46人)、院生9人での運営でした。

■卒論中間発表会

9月28日(木)10時00分から14時30分まで第1学舎A301会議室で実施しました。発表者は4年次生で、卒業論文提出予定の13名でした。

■地域調査士講習会

10月15日(日)に日本地理学会の2023年度第3回地域調査士講習会が関西地区で実施されました。遠隔地の便宜を図ることを考え、東京で対面実施された前2回と異なりZoomで実施されました。今回担当の立命館大学の花岡准教授が「心構え」の講義を行いました。3月現在、野間晴雄教授が地域調査士認定委員会委員となっています。

■秋の日帰り巡検

10月1日(日)に秋の日帰り巡検が開催されました。「岸和田と貝塚—泉州中核部の自然、産業、歴史景観—」でコースは以下の通りでした。担当は、野間晴雄、土屋純教授でした。参加は教員3名のほか、2年次生29名、3年次生18名、院生5名そしてOBG4名を含め総勢59名で、徒歩と鉄道を利用する巡検となりました。JR久米田駅～久米田池～JR久米田駅～JR下松駅～JR東岸和田駅～南海岸和田駅～岸和田市内(昼食・一時解散)～きしわだ自然資料館(再集合)～自泉会館～岸和田だんじり会館～岸和田城～南海・蛸地蔵駅～南海・貝塚駅～紡績工場の残存景観～願泉寺(寺内町)～南海貝塚駅。

■地理学・地域環境学実習

10月3日(火)～7日(土)にかけて、熊本県熊本市にて実習調査(担当は松井・黒木)を行いました。3・4年次生22名、大学院博士前期課程1年次生3名、ティーチングアシスタント(楊瑠屹)1名、教員2名の計28名でした。調査は、低地農業、高地農業、歴史・文化、産業、観光・交通、自然・防災・災害の6班を編制して実施されました。熊本市役所各部署、植木のスイカ農家、河内のミカン農家、JA熊本市、子飼商店街、熊本空港などの聞き取り調査を実施し、熊本城跡地の土地利用変遷、半導体産業の立地、くまモンの土産品販売、文化財の復旧に関し現地調査を行いました。それら成果をまとめた調査報告書『熊本県熊本市の地理』が2024年3月に刊行され、全国の地理学教室やお世話になった関係者・機関に発送の予定です。

■第23回人文地理学会 学会賞

土屋 純教授が、人文地理学会の学会賞「一般図書部門」を11月に受賞されました。受賞対象図書は『地理学で読み解く流通と消費:コンビニはなぜ集中出店するのか』ベレ出版、2022年、285頁。

■史学地理学会にて野間先生講演

12月2日(土)関西大学史学・地理学会2023年度大会が第1学舎B102にて、野間先生による「プランテーションとは何だったのか—移植(planting)の地域学—」と



写真 野間先生の講演

題する講演がありました。関西大学在職22年間における海外を中心とする研究成果が多数紹介されました。

■第5回千里地理学会大会・卒論セミナー

12月9日(土)関西大学第1学舎E602教室で、13時～14時まで卒業論文に向かう現3年次生を対象とする卒論セミナーが開催されました。担当は土屋教授でした。その後、14時30分から17時まで、同教室で第5回千里地理学会大会が開催され、計63名の参加がありました。その実施には、大学からの学会開催補助をいただきました。大会後は17時30分までは総会、18時からは懇親会が尚文館食堂で開催されました。

今回は、田中清隆先生には新しい巡検の試みを、野間先生には地理を探求する旅での出逢いを講演いただきました。それに先立って、M1による実習調査の成果報告も行われました。発表題目は以下の通りです。浅野裕斗・田原和真(関西大学大学院博士前期課程の代表)「熊本実習調査中間報告」、田中清隆(本学非常勤講師)「巡検で学ぶ中・南河内の地域文化—景観の復元を利用して—」、徐 雨辰(本学博士課程後期課程)「17世紀におけるジャワ島の伝統的製糖業の展開—オランダ東インド会社と中国移民—」、野間晴雄(本学特別契約教授)「出逢いの地理学—私の師匠・同僚・学際交流、そして学生—」。

■集中講義の実施

2024年1月24(水)～27(土)に大学院博士前期課程向けの講義「自然地理学特別研究」が、駒澤大学・文学部地理学科の小野映介教授により実施されました。ここでは、自然環境問題や自然災害に焦点を当てて教授されました。

■教員の外国出張

野間晴雄教授が、9月に台湾にて、サトウキビ栽培と流通の歴史を現地調査されました。

松井幸一准教授が、12月に台湾にて、石敢當の分布を現地調査されました。

土屋純教授が、3月にインドにて、ショッピングモールの実態調査をされる予定です。

黒木貴一教授が、3月にスリランカにて、自然災害被災と適応の実態調査をされる予定です。

■野間先生退職記念行事

3月2日(土)午後大阪ガーデンパレスにて野間晴雄先生ご退職記念講演が、それに引き続いて古稀祝賀の会が行われます。両行事ともに関西大学関係者にとどまらず、奈良大学、奈良女子大学や滋賀大学勤務時の関係者皆様等の参加が予定されています。この日にむけて準備された『ジオグラフィカ千里』3号が準備され、記念エッセイ集や『千里地理通信特別号』が配布される予定です。

■2024年3月の卒業生・修了生

2023年度の卒論提出者は13名、大学院博士前期課程の修了者は4名です。卒論・修論題目は秋号に掲載します。2024年2月8日に実施した口頭試問の結果、塩谷唯さんの「京都市の地理的条件による自然災害への防災意識の違い—京都ノートルダム女学院中学高等学校を対象に—」が優秀論文となり、卒業式の折に学部長表彰を受けます。

本稿を執筆する1ヶ月前の11月に、インドシナ三国（ベトナム・ラオス・カンボジア）をおよそ3600キロ車で走破し、農業土地利用の現状を記録する科研の調査を行った。科研の分担者である大阪公立大学の祖田亮次教授と大阪大学の蔣宏偉助教とともに、ハノイから出発してベトナムとラオスの北部山地をめぐり、ビエンチャンからはほぼメコン川沿いにカンボジアのプノンペンまで南下しながら農業土地利用をひたすら観察・記録、最後にベトナム南部のメコンデルタの農業をみるという行程だった。

この30年ほどのあいだ、エチオピア、中国、ラオスで、どちらかという狭い地域に絞って定点観測を続け、ミクロな社会環境を詳細に調べ上げるといったストイックな研究をしてきた。しかし一方で、広範囲に移動しながら目に見えるものを観察・記録し、地域を面として把握するという研究手法に学部学生の頃から魅力を感じていた。当時京都大学東南アジア研究所にいらっしやった故・高谷好一先生をはじめ、そのような手法で精力的に東南アジアの研究を行っていたあこがれの研究者たちが身近にいたからだ。あこがれの研究者たちの一人に、地理学教室の大先輩であり、当時気鋭の研究者であった野間晴雄先生がいらっしやった。

ご本人は覚えていらっしやらないかもしれないが、野間先生に初めてお目にかかったのはダッカだった。学部3回生の夏に、ひとりでバングラデシュのチッタゴン丘陵地域を歩いて土地利用をみる計画を考え、実行したときだ。ダッカでは、当時JICAのプロジェクト専門家として駐在しておられた安藤和雄先生（元京都大学教授）のご厚意により、オフィスの一室に居候させていただいた。

ダッカ滞在中、安藤先生はお仕事で訪問する先々に、ただのアホ学生だった私を連れ回して下さり、調査のためダッカに来られていた海田能宏先生（京都大学名誉教授）や河合明宣先生（元放送大学教授）、ケシャブ・ラル・マハラジャン先生（現広島大学教授）をはじめ、様々な研究者を紹介して下さった。紹介していただくときには安藤先生はいつも「彼は野間さんの後輩なんですよ」とおっしゃって下さった。

チッタゴン丘陵徒歩の旅を終えてダッカに戻り、安藤先生に帰国のご挨拶を、というときに、JICAのオフィスに野間先生が来られ、初めてお目にかかることができた。一緒に調査に行かれるところだったのか、日本出

国前に安藤先生を紹介して下さった田中耕司先生（当時京都大学助手、現名誉教授）もいらっしやったのを覚えている。

帰国後、バングラデシュの旅の興奮がまだ冷めぬ頃に、幸運なことに人文地理学会例会でベンガルデルタの開発史に関する野間先生のご発表を聴く機会があり、歴史地理学的手法も駆使しつつ人と環境との関係に迫っていく野間先生のご研究に、非常に強く印象づけられた。その後私は大学院に進学して、最初は台湾の離島（蘭嶼）での調査に着手したものの、いろんな経緯があって東南アジア研究に未練を残しつつ、エチオピアで焼畑の研究を始めることになったのだが、その後も研究を構想し、続け、展開していく上で野間先生から受けた影響は大きかった。2013年からは名古屋大学の横山智教授の科研分担者としてラオス中部の焼畑の村で調査に着手することになったが、そのときに真っ先に思い出し、研究構想の参考にしたのが、野間先生が1980年代に書かれた農村地域における時間地理学研究的レビュー論文や東北タイ・ドンデーン村の生活行動に関する論文だった。野間先生とは2010年代になってからも京大の小島泰雄教授の科研でフィールド研究をご一緒する機会に恵まれたが、今後もまたそうした機会が訪れることを待ち望んでいる。

（さとう れんや：大阪大学教授、本学非常勤講師）



チッタゴン丘陵の焼畑（陸稲栽培）と出作り小屋
（1989年8月）

千里地理通信 第90号

2024年3月1日 発行 (600部)

関西大学地理学・地域環境学教室
関大地理同窓会

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35

関西大学文学部地理学・地域環境学教室内
編集担当：黒木貴一・張 然

TEL：06-6368-1121（内線4890：大学院生室）

e-mail：kandaichiri@gmail.com

http://www2.kansai-u.ac.jp/kugeoenv/

郵便振替：大阪 00970-4-81149